

---

# アイスクリーム

蛇不

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイスクリーム

### 【Nコード】

N9211T

### 【作者名】

蛇不

### 【あらすじ】

8月3日。

父と子、二人の親子がお墓の前で手を合わせているところから、物語は始まる。

この日は主人公の少年、『シンジ』にとって特別な日だった。彼が殺してしまったと言う、母の記憶。

彼の視点で書いた回想が、ストーリーのメインとなります。

## 命日（前書き）

第一話です。

宜しく願います。

## 命日

8月3日

今日は母の命日だ。

母は俺が3歳の時、死んだ。

父「シンジ。俺は先に帰るから、後は宜しく頼む。」

今日で13回目の命日だが

父は毎回こうやって

足早に母の元を去る。

墓参りが終わると、俺はいつもアイスクリームを買って帰る。

別に「暑いから」と、いう訳ではなく。

この日は特別なんだ。

自転車の鐘「チャリンチャリン」

シンジ」「……」

自転車の鐘の音を聞くと、思い出す。

母が死んだ

あの日のことを。

母を殺したのは俺だ。

幼き日の記憶（前書き）

第二話です。

宜しくお願ひします。

## 幼き日の記憶

話は14年前に遡る。

当時、俺はまだ大人の事情ってやつを当然分からなかったが、父から後で聞いた話だ。

父が勤めていた会社が、業績不振で倒産寸前。リストラ対象として父が選ばれ、リストラさせた。

まあよくある話だ。

それからは母も俺を育てながら工場で働いていたらしい。

俺は幼稚園に預けられ、迎えにくるのはいつも父だった。

母が帰ってくるのは夜の9時とか10時とか。遅い時には0時を回っていたこともあったという。

夜飯はいつも弁当かラーメンか……そんなものだった。

3歳にしては栄養のない食事をしていたと、父が言っている。

その事に関しては、別に俺も恨んじやいない。

寧ろ。

母に会えないことの方が辛かったと、当時そう記憶している。

そして、朝はまた早い。

8時には家を出ていく。

「チャリンチャリン」

と、いつも“行ってきますのブル”を鳴らして。

## 約束（前書き）

第三話です。

宜しく願います。

## 約束

そして“あの日”がやってくる。

その日。母の仕事が早く終わると言うので、仕事帰りにアイスクリームを買って来てくれることになった。

母「シンちゃん。いつもお母さん忙しくてごめんね。今日はシンちゃんの好きなアイスクリーム買ってきてあげるからね！」

シンジ「やったあ！チョコモナカ！チョコモナカがいい！」

母「わかった！じゃ〜良い子で待ってて！お母さん今日はすぐ帰ってくるから！」

「じゃあいつてきますー！」

そう母はニコニコ笑いながら言った。

そして母はまた「チャリンチャリン」とベルを2回鳴らし出ていった。

## チョコレート（前書き）

第四話です。

宜しく願います。

## チョコレート

そして夕方。

約束通り、母早くに帰ってきた。

母「ただいまあ〜。」

シンジ「おかえりなさい！チョコモナカ！チョコモナカ！」

俺ははしゃいだ。

今思うと、その態度からして、多分、母よりアイスクリームの方を優先していたに違いない。

しかし、そんな俺を見て母はこう言った。

母「ごめんねシンちゃん…。チョコモナカ売り切れだったんだあ…。でもほら！チョコレート買ってきたよ！はい！シンちゃん！」

この時俺は何を思っていたのだろうか。

多分期待していたアイスクリームじゃなかった事にひねくれてしまったのだろう。

「チョコレート違うもん！アイスクリームだもん！チョコモナカがいいもん！」

と、折角母が買ってきてくれたチョコレートを床に投げつけ、わんわんと泣きじゃくってしまったのだ。

## 優しい質問（前書き）

第五話です。

宜しく願います。

## 優しい質問

俺のその態度に、母は怒ることなく、

「シンちゃんごめんね…ごめんねシンちゃん…ごめんねごめんね…」

と、悲しそうな顔で俺をなだめた。

すると父が泣いている俺の元へやってきて、「こう言っつ。

「シンジ！わがまま言っつて食べ物粗末にするな！」と。

まあ当然だ。

その父の怒声に拗ねってしまった俺は、ひねくれた顔をし、黙っつてその場に座り込んでしまった記憶がある。

そんな幼心の俺を気遣い、最初に話かけてくれたのは母だった。

「ねえ、シンちゃん。今日はハンバーグするんだけど、食べる？」

最近は何も聞かなくなった母の優しい質問。

しかし、一度拗ねてしまった俺は、その質問に、素直に答えられない。

すると母は、独り言のように言っつ。

「シンちゃん、手伝ってくれるかな？シンちゃんが手伝って  
ないとハンバーグできないなあ。」

「手伝ってくれる？」

うつ向き、ひねくれた俺の顔に、おでこをくつつける。

その母の顔を、上目でチラッと見ると、そこにはいつもの笑顔が  
あった。

俺は少し考えた素振りをし、首をコクツと縦に降る。

「よ〜しじゃあ作るっ〜！」

そう言うと、母は俺の頭の後ろを優しく撫でた。

今日までの想い（前書き）

最終話です。

宜しく願います。

## 今日までの想い

その晩はご馳走だった。

俺は小さな手で、ハンバーグを捏ねたのを覚えている。

そう言えば父は、俺が物心ついた時から、食べ物を残すことについて煩い人だった。

さっきの怒声は、そんな父だからこそ出た俺へのメッセージだ。

そう今では思う。

そして

夕飯を食べ終わると、直ぐ、いつものように父とお風呂へ入る。

その時間こえてくる。

「チャリンチャリン」

それが

俺が聞いた、母の最後の“いつてきますのベル”だった。

交通事故だった。

かごには、チヨコモナカが一つだけ袋に入れて、かけられていたと言う。

あれから13年たった現在。  
今日の度に想う。

何故あの時ひねくれてしまったのだろう。  
何故あの時チヨコレートで我慢しなかったのだろう。  
何故あの時ありがとうが言えなかったのだろう……。

後悔の念と、あの時、上目で見た母の優しい笑顔。  
そして、最後に聞いた、あのベルの音<sup>ね</sup>だけが、子守唄のように悲しく頭に残る。

優しかった母はもういない。

FIN .

## 今日までの想い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。  
宜しければ、評価等して頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9211t/>

---

アイスクリーム

2011年10月9日08時10分発行